

—英語と日本語をつなぐ—

だれよりも言葉を大切にした英語学者「島村盛助」

四月、わたしは、前原中学校に入学し毎日楽しく通っている。通学路も変わり、小学校の時に何気なく見ていた景色も、違った感覚で新鮮な気持ちになる。その通学路の途中に、緑に囲まれた立派な門構えの家がある。道に面してそびえるように立っている二本の太い棕の木が印象的だ。

わたしは、そこを通るたびに気持ちが落ち着くような不思議な気持ちになった。早朝の柔らかな日差しに包まれた大木の上の方からは、小鳥のさえずりが迎えてくれた。また、夕暮れ時には、門から母屋までのゆるやかなカーブを描いた通路の両側にある低木が、緑色のカーテンを垂らし、部活で少しつかれた気持ちをなぐさめてくれた。

「この家には、どんな人が住んでいるのだろう。ずっと前から暮らしているのかな。」夕食の時に、このことを話題にすると、祖父が、「あのお宅は、島村さんといって明治の頃には百間村の村長さんを務めていたんだ。その息子の盛助という人は、子どもの頃から勉学にはげみ、有名な英語の学者になられたんだよ。わたしも、何度かおじやましたことがあるよ。」と、得意そうに話してくれた。

「えっ、英語学者。それじゃ、英語の本なども書いていたの。」

「たしか、有名な英語の辞書をつくっているはずだよ。」祖父から島村盛助の話聞いたとき、わたしには、あの日本的な家のたたずまいと、「英語」とが結びつかなかった。ましてや、自分の住んでいる宮代町に有名な英語学者がいたなんて聞いたこともなかった。中学での英語の勉強は、楽しかったが、「日本人なのに、英語を学ぶってどういうことなのだろう。」そんな疑問も心の中にあった。わたしは、祖父の話聞いて何だか興味がわいてきた。

次の日の朝も、棕の大木と門が、いつものように迎えてくれた。表札を見ると祖父の言う通り「島村」とあった。英語の授業中、「島村盛





助」という名前が何度も頭の中に浮かんできた。放課後、わたしの足はパソコン室へ向いていた。キーボードで「島村盛助」とゆっくり入力してみた。すると、画面にゴシック文字の「島村盛助」が幾つも飛び込んできた。わたしは目を丸くした。「すごい。こんなにたくさん……」各ホームページを開いていくと、島村盛助が編さんした「岩波英和辞典」は、今でもその評価が高いこと、また英語の翻訳を中心に多くの作品を発表していること、さらに、夏目漱石をはじめとする文学者と交流があったことなどが書かれていた。

その中に、宮代町郷土資料館で特別展「英文学者 島村盛助」を開催した情報もあったので、休みの日に訪ねてみようと思った。

資料館では、学芸員の方が資料を使っていないに説明してくれた。

「盛助さんは、明治十七年、もんまなかむら百間中村、今の宮代町字中あざなかに生まれました。」………小さい頃は、父が愛好

していた俳句の影響を受けて育ちました。盛助自身も、短い言葉で様子や気持ちを豊かに表現する俳句に興味を持ち、生涯を通して続けました。学生の頃から、英語で書かれた本を読み、東京帝国大学（現在の東京大学で英文学を学びました。在学中には英語の翻訳をしたり、小説などの作品が当時の雑誌や新聞にのったりするなど、才能を発揮しました。その後、盛助は英語教師への道を歩みました。旧制山形高等学校（現在の山形大学）で英語科の教授を担当する中、日本の研究員としてイギリスに渡りました。そこで、盛助は一生けんめい英語を研究しました。でも、学べば学ぶほど自分たちが使っている日本語の大切さを感じるようになりました。つまり、その英語にふさわしい日本語にすることではじめて、互いに心から通じ合うことができると考えました。

そして、帰国したのち約七年の歳月をかけ、他の二人の協力者と一緒に、盛助の思いを「岩波英和辞典」編さんを通して実現していききました。盛助は、一つの単語の意味を訳すためのよりふさわしい日本語を見つけるために、何度も何度も修正を繰り返しました。元の原稿が注意書きで真っ赤に染まってしまったというエピソードも残っています。初めは、一、二年でできると思われていたのですが、およそ三万四千語を完成させるのに七年もかかりました。盛助は、それほどまでに地道に、しかも情熱的にこの仕事を進めました。当時、盛助に学んでいた学生の一人は次のように語っています。「シェイクスピアを先生が訳すと、あたかも初めから日本語で書かれたかのようになめらかで美しい

文章になっていました。」最後に、学芸員さんはこのように話してくれた。「英語を理解することは、自分たちの国の言葉を理解すること。つまり、盛助さんは、英語学者でありながら、英語以上に日本語という言葉の大事にし、二つの言葉を結びつけてくれた方だったのでね。」

わたしは、学芸員さんが自分のことのように話してくれる姿が心に残った。また、ホームページで紹介されていた「初めて買った敬愛する岩波英和辞典（島村盛助）」の文章を思い出し、今でもこの辞書を大切にしている人の気持ちがわかっただけでなく、盛助の姿が見えるようで何だかほこらしい気分になった。そして、日本語のもつ響きや美しさを大切にすることに信念をつらぬき英語を研究し続けた盛助の生き方に強く心を打たれた。

「自分も目標に向かって、いっしょうけんめいがんばっていこう。」あの大木と門、緑に囲まれた盛助の住まいは、いつもわたしに語りかけてくれている。

